

確認でき、病変の除去やその後の欠損部への材料の充填が容易に出来る利点がある。破折歯には、今回行なわなかったが、露出歯質を完全に被覆する型の築造体の製作が破折の拡大防止や歯周組織の安静に有効ではないかと思われる。既存の歯周病変と穿孔部や破折部の病変とが合併している場合には、同部より歯冠側では、歯周組織の再生が難しいと思われた。

演題3. 色素を応用した象牙質透過性に関する研究 — 仮封材の象牙質透過性に及ぼす影響 —

○手塚 永均, 久保田 稔

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

目的：色素を用いた分光分析法による象牙質透過性試験法を考案し、この方法を用いて仮封材に接触した象牙質面の透過性について検討した。

実験材料および方法：実験には、屠殺直後抜去した3～4歳の日本短角種、牛下顎左右側中切歯I1を一組として200本の歯牙を使用した。

実験材料には、ユージノール系のプロパック（GC社製）、ユージグイン（昭和薬品化工社製）、非ユージ

ノール系のフリージノールテンポラリーバック（GC社製）、ノージノール（COE社製）ならびにHY剤を含んだハイボンドテンポラリーセメントハード（松風社製）の5種類の仮封材を用いた。

試料は、歯冠部唇面の象牙質面を#600の耐水研磨紙を用い、手圧下にて10往復させたものを被検象牙質面として、仮封材を被覆したものと、なにもしないコントロール群を作製し一つの仮封材につき20本の試料を作製した。次いで、37℃水中に24時間および1週間保管した後、探針にて仮封材を除去し、色素の浸透表面積を規定し、2%メチレンブルーに24h浸漬させた。浸漬後、規定した部分を切出し10%硝酸に48h溶解させ、溶解した溶液の吸光度を分光光度計にて測定し、象牙質の透過性を評価した。

実験結果ならびに考察：1. 仮封材に接した象牙質面の透過性は減少していた。2. 仮封材の接触時間は、象牙質透過性に影響し、接触時間が長くなると減少する傾向を示した。3. コントロール群の24時間と1週間水中保管において色素浸透性に差がなかった事から、仮封材自身が象牙質透過性に影響を及ぼしている事が推測される。4. なお、本法は、象牙質の透過性を定量的に判定するものとして有用な方法である。